

論
説

近世大坂の借屋請人制度

牧 英 正

まえがき

一 大坂の家請人仲間

(1) 大坂の借屋人

(2) 家請人仲間の成立とその経過

二 京の家請会所

(1) 町々の借屋人規制

(2) 京の家請会所

(3) 借屋人請状

結言

ま え が き

近世町方に居住し、町方人別に加えられている者を町人と呼んでいるが、狭義には家持の町人と借屋人とが区別されたことは周知のとおりである。大坂・京の触書などでは、「借家」と書かずに「借屋」の字を用いているので、以

下借屋と表記する。

喜田川守貞は、文化七年（一八一〇）大坂に生まれ、三一歳で江戸に移り住んで当時の両都の世情を比較しながら貴重な記録を残しているが、彼は借屋人について、こう伝えている。⁽¹⁾

借屋人は…家主の造りたる家を月収（家賃）を以て仮居する者を云、蓋江戸の如く地のみを借て家は自費に造り住む者京坂に無之、皆専ら宅地ともに仮居する也、月収大略一延銀五六分より一文目二三分に至り、或は土蔵あり、或は壯麗なるあり、江戸の不及者あり、然ども家美にして月収江戸より賤し、一延は長さ六尺五寸・巾三尺二寸半を云、乃一畳を云也、又江戸には地借と云て宅地のみ借用して家宅は自費を以て造り住む者多し、京坂には地借極て稀とす、借屋人は甚多し、借屋江戸にて店借とす

大坂では、後に数字をあげるが、借屋人が町の構成員に占める割合は三都の中でも最も高い。大坂の町人、屋敷を持つ商人たちについては論及されることが多いが、町の構成員の過半を占めた借屋人については、これまであまり言及されることはない。私はこうした借屋人に関心をもっていたが、本稿はその一端である。

借屋人が家を借りるには、請人をたて請状を作成することを、早くから強制されてきた。「御触書集成」をみると慶安四年（一六五二）三月に⁽²⁾

一 棚衆置候ハム念を入、たなの者移り不申前廉ニ請人をきわめ、たなかし可申事

一 棚之者致欠落候ハム、棚請人ニ御懸り可被成との御事ニ候間、能々吟味致し、慥成請人を取可申事なる箇条がみえる。天和三年（一六八三）年九月にも⁽³⁾

一 町中店借シ候者、彌店請人に念を入取置可申候、慥ニ無之者ニ店借申間敷候、徒者差置候ハム、大屋は勿論、

品ニ寄、五人組、名主まで曲事ニ可申付候、五人組相改、互ニ店之者吟味可仕事、并出居衆差置候共、請人取之、慥成もの置可申候、徒もの差置候ハ、是又大屋、五人組、名主え懸可申候事

(中略)

右之通、相触候上ハ寺町切ニ人別帳を以互ニ相改、毎月町年寄方迄相届可申候、自今以後、徒者出候ハ、科之輕重ニより、名主、五人組、大屋、店之五人組迄急度可申付者也

とあり、享保一五年(一七三〇)年五月の触書は⁽⁴⁾

一 町々ニて店借シ候節、元家主方吟味も不遂、猥ニ店借候故、尋者等差置候儀も有之、并筋惡敷人宿出入其外不埒成儀共出来候之間、自今元家主方承届、不埒者ニ無之候ハ、店借シ可申候、新規之店かりハ其者出所承届、店借シ可申候

右之通、吟味も不仕店借置、不埒之出入致出来候は、家主ハ勿論、品により名主、五人組まで可為越度候、此旨町中不殘可触知候以上
とされている。

借屋人を置くとき請人を立てることは厳しい定めであつた。

京では、文禄五年(一五九六)の鶏鉾町の自治的な「定法度」⁽⁵⁾は

町人到家借候共、御町え案内申、慥請人相立、其上にて借可申事、同町中ニ請人可被立事なる一条を設けていた。江戸時代になつてからも、寛永六年(一六二九)の同町の条目⁽⁶⁾は

宿かし候事、請人なくして宿かし候ハ、此以前のこく家可為闕所事、并幼少成享主・後家所ニハ一夜の宿たり

共、職をも不仕妻子もたさるものにハ縦請人在之とも宿借り申間敷事

とあった。町の自治的規約のみではない。慶応長八年（一六〇三）板倉伊賀守（勝重）が上京年寄にあてた「毎月可触掟之事」中に⁽⁷⁾

洛中洛外ニ借屋之事、商人諸職人百姓共ニ請人次第届借可申候、但、奉公人ハ伊賀守切手次第ニ可借候、付家中之者可為同然事

といい、「板倉周防守被定置候二十一ヶ条」（元和八年十一月十三日）中「京都可相触条々」には⁽⁸⁾

一夜之宿たりと言共よく吟味仕かすへし、并借屋かし候共老ヶ月切に可借、月半に俄に宿をかへ申におゐてハ此方え可申来、きわめ之一ヶ月過自然他町へ宿替候ハ、最前之宿よりさき〳〵の町え理可申置事

とあり、また同寛永六年十月十八日には⁽⁹⁾

宿かし候事、請人なくして宿借候ハ、此已前のことく家可為欠所事、并幼少成亭主後家ニハ一夜之宿たりとも、

職をも不仕妻子も不持者ニハ縦請人在之とも、宿借間敷事

延宝五年（一六七七）三月二七日東西両町奉行の名で出された覚には⁽¹⁰⁾

請人無之者不可宿借、勿論不届者又は不審成者其町ニ不可差置事

との箇条がみえる。

ところが、大坂においては、この種の規制がさほど厳しくなかったのではないかと思われる節がある。見出しえないということが触がなかったということにはならないけれども、『大阪市史』所収の触書に見える借屋人に関する規定の初見は、享保一五年（一七三〇）正月二十日の町触のなかに⁽¹¹⁾

一 まきらわしき者町中に不差置、店をかし候ニも、随分其者を致吟味可差置候（下略）

とあるものであるが、この町触は末尾に「松平伊豆守殿（老中）被仰聞候間、三郷町中可相触者也」とあり、江戸から出された書付を伝達したものであることが知られる。

ちなみに、奈良の町触では、管見の範囲では、貞享四年（一六八七）の町支配に関する「定」（全二〇条）の第九條に⁽¹²⁾

借屋之者念を入家可借之、勿論他国より来、店借シ、他町より来り店借り独身の者まで由来を正し店請証人慥にたて、手形を取可借之、請人なくして一夜のやとも借へからず、縦請人有之と云とも不慥と及見は宿かすへからず、但、族籠屋之分ハ一夜之宿くるしからず、二夜ともやと致にをめてハ請人を取、其趣町之年寄・五人組え可相断事⁽¹³⁾とある。

請人は、「律令要略」によれば、相互に請人となる「相請」、三人で互いに請人となる「鉄輪請」を禁止されていたし、地代・店賃の滞納があり訴訟になると、当人、店請人、地請人に「三十日切済方」がいい渡された。⁽¹³⁾

借屋にさいし請人をたてることは、このように厳しい条件であったと思われる。これらの諸規定は、京都のばあいは早くから自治的な団体の自衛上の目的から、江戸期になってからは警察上の目的から設けられたものであったが、また貸主の側からすれば借屋人の身元の保証や家賃収入の確保のために望ましいことであった。尤も、これらの町の

規制を比較すると、どうも大坂の町の規制がさほど厳しくないように見受けられる。

こうして、借屋人は、借屋にさいし請人をたて、家主に請状をいれる。当時流布した大坂の文例集はその請状の書式をあげている。左に示すのは、大坂心斎橋の書肆河内屋平七から板行された「萬證文手形便覧」所収の同証文の雛形である。⁽¹⁴⁾

店請状之事

一 此誰と申者、生国より能存知慥成者ニ付、我等請人ニ相立、貴殿店借差置申処実正也、店賃之儀は毎月晦日無相違為相済可申候、若相滞候ハ、請人方より御勘定可仕候、店御入用之節は何時成共早速為明渡可申候、其節故障等申間敷候事

一 御公儀様御法度之儀は不及申時々之御触之趣堅ク為相守、勿論博奕賭之諸勝負事并隠売女取扱人請其外惣而人集等為致申間敷候、出居衆差置候ハ、貴殿御指図請可申候、縦令親類ニ候共無断一夜も泊置申間敷候事

一 宗旨之儀は代々何宗ニ而、何町何寺旦那ニ紛無御座候、則寺手形請人方ニ取置候間御入用之節は差出可申候、惣而此誰儀ニ付何様之六ヶ敷出入致出来候共我等引請、貴殿之少も御苦勞懸申間敷候、請人住所替仕候ハ、早々相届ケ可申候、勿論此者我等と相請ニ而は決而無御座候、為後日仍如件

年号 月 日

何町誰店 店請人 誰

借り主 誰

家主 誰殿

また左の請状は、同家人が別宅借屋したばあいの請状である。⁽¹⁵⁾

一札

一 私同家誰と申者、此度其元借屋借り請、何屋誰と名前差出し別宅仕候、家内人別者、是迄我等方人別ニ相加へ有之候者共ニ而、別紙寺請状差出申候、勿論諸掛り合等一切無之、右別宅之儀ニ付、故障之儀無之候、何時ニ而も家人用之節者、此方え引取、家明渡し可申候為後日一札仍而如件

年号月

何屋誰

何屋誰殿

いづれにしても、ここに見られるように店請状は、請人が借屋人の身元を保証し、借屋人の義務履行（ことに家主が必要なときの家明）を約束した文書であって、請人は借屋人について重大な責任をもった。

ところが、じっさいには判錢をとって請人となるものがあつた。延享元年（一七四五）板行の「今昔出生扇」⁽¹⁶⁾には首を縊ろうとした借屋人をみつけた家主が、慌てて抱えおろし「扱々無分別成事を思ひ立れし事かな、其心が有ては此方の借屋には置れず、どっちへ成共早ふ宿替仕て下されと、請人をよび付ケ若もの事が有ては家主の難儀なれば、請状の通其方へ送りぬ、請人といふも、式奴三奴の礼銀取て渡世する請屋なれば、手前に長々かくまひ置事まならず情なく追出しける」とみえる。

それどころか、大坂では享保一七年（一七三二）になって、判錢をとって請人となることを業とする仲間が許可され、この仲間は天保の改革でも解散させられずに明治初年にいたる。

大坂で借屋請人仲間が認められて間もなく、京でも同様な願いが出された。その後曲折を経るが、結局京では根付かなかつた。

江戸については、精査していないが、このような仲間は無かつたようである。石井良助氏は大坂の借屋請人制度について略述したうえで「このような制度は江戸にはありませんでした」と述べておられる。⁽¹⁷⁾

よく引合にだされる川柳に、こんな句がある。

大阪の どこにひと旗 あげる余地

西鶴以来、上方商人の信条は「始末、才覚、算用」とされているが、大坂ではこの才覚がさまざまな面で発揮されているのを見いだすことができる。近世大坂の触書をみてみると、制度の隙間に儲けの余地を見つけて願いが出され、それが企業化されているものが少なくない。ここに取り上げる家請人仲間の制度もその一つである。

大坂の家請人仲間については、幸田成友編の『大阪市史』に概説がみえる。その他、管見の範囲では、前記のように石井良助氏が言及しておられるが、その内容は『大阪市史』を出るものではない。

以下、大坂の借屋人および家請人仲間の沿革について述べ、この影響をうけた京都における経過を確かめ、これがどうして大坂においてのみありえたかについて考えてみようと思う。

- (1) 喜田川守貞『類聚近世風俗志』七一頁。
- (2) 『御触書寛保集成』一〇七九頁、二二四〇号。『徳川禁令考前集』第五、三二八頁、三〇九〇号。
- (3) 『御触書寛保集成』一〇八一頁、二二四九号。『徳川禁令考前集』第五、三三一頁、三一〇〇号。
- (4) 『御触書寛保集成』一〇八三、二二五四号。『徳川禁令考前集』第五、三三三、三一〇二号。
- (5) 『公同沿革史』二四九頁。
- (6) 『公同沿革史』二四六頁。
- (7) 『京都町触集成』別卷二所収、二六六号一六二頁。
- (8) 『京都御役所向大概寛書』上巻、一八六頁、『京都町触集成』別卷一所収、一〇九頁。
- (9) 『京都町触集成』別卷二所収、三二〇号、一八五頁。
- (10) 『京都町触集成』別卷二所収、五四四号、二六九頁。
- (11) 「惣年寄井惣代慎之事、付り、まきらハしき物店借間敷事、女名前之事、博奕彌御法度之事」『大阪市史』第三、二七三

頁、触一三八〇号。

(12) 南都奉行所与力玉井家文書『序中漫録』和州志触事一、奈良県立奈良図書館所蔵。

(13) 『律令要略』(『近世法制史料叢書第二』)所収、三一七頁。「相請とハ互ニ請ニ立候を云、兩人共咎メ、鉄輪請とハ、三人

ニテ請ニ立会候ヲ言、咎メ」とある。京都の天明二年九月一四日の触に「近世借屋人共相互ニ引取人ニ相立罷在、懸り合引取候節差支、彼是甚紛敷いたし形、不埒ニ候、以来相互ニ引取人ニ立候儀堅致間敷候、此外所々ニ引取ニ相立、渡世同様ニいたし罷在候もの有之趣合い聞え、是亦不埒ニ候云々」(『京都町触集成』別巻二、二六六号、一六二頁)。

(14) 筆者所蔵『萬證文手形便覧』刊年不明。

(15) 『古事類苑』政治部三、一三〇二頁。

(16) 八字屋自笑・其笑「今昔出生扇」(中田薫『徳川時代の文学に見えたる私法』所引)

(17) 石井良助「法制史より見た大坂」(『大阪文化史』)所収一三五頁以下)。同氏はまた「江戸時代前期江戸の取引法史」のなかで「店立すなわち貸家明渡の訴訟は江戸時代ではなかなかの難問であり、別稿でこれのための特殊の施設も考えられたことを述べたが、江戸ではそういうことはなかった、」(『近世取引法史』)所収三二〇頁「別稿に…」というのは「江戸時代前期大坂の取引法氏」に大坂の享保一七年家請人仲間の請書を引用して簡単な説明を加えたことをいう。(同書一七一頁)

一 大坂の家請人仲間

(1) 大坂の借屋人

まず大坂の町に借屋人はどれ程の比率を占めていたのかを確かめておこう。

大坂三郷全体の数字としては、元禄二年(一六八九)六月五日の調べがある。これによれば

大坂三郷総人数

三二八、五九二人

内男

一七九、三七六人

女 一四九、二一六人

九歳以下 五三、四五四人

家持 一二、九七七人

同妻子眷属 二七、三六九人

借屋人 六八、三一五人

同妻子眷属 九九、三五四人

家持借屋人の下男下女 六七、一二三人

となつてゐる。ここに上げられた家持と借屋人の数は、別に妻子眷属の数が上げられているから、筆頭人(戸主)の数、すなわちそれぞれの軒数とみてよい。そうだとすれば、借屋人は家持の五・二六倍となり、借屋人の軒数は三郷総家数の八四パーセントを占めることになる。

もちろん、借屋人の比率は時期と町によって異なる。

北組の菊屋町は長年にわたる人別帳を残しているが、同町の家持・借屋人数の変遷を示したのが第一表である。⁽¹⁸⁾家持と借屋人との比率は時期によつてかなりの変動を見る。借屋人の比率は漸増し、一八世紀後半ピークに達し、その後漸減している。

中埜喜雄氏の調査によれば、⁽¹⁹⁾道修町三丁目の軒数は、宝永三年(一七〇六)家持九、家守一一、借屋人二〇三、元文三年(一七三八)家持一四、家守一〇、借屋人一二九、延享三年(一七四六)家持一四、家守七、借屋人一二一、天明五年(一七八五)家持一四、借屋人九九、寛政一年(一七九九)家持一七、家守一八、借屋人九六、文政七年(一八二四)家持一九、家守四、借屋人九九、明治四年(一八七二)家持二三、借屋人七七となつてゐる。借屋人の

第1表 菊屋町家持・借家人の推移

年次	家持	借家人	借家人は家持の	借家人の構成比
寛永16 (1639)	10	13	1.3倍	56.5%
万治2 (1659)	12	31	2.6倍	72.0%
天和2 (1682)	23	83	3.6倍	78.3%
元禄11 (1698)	23	89	3.9倍	79.5%
正徳3 (1713)	21	171	8.1倍	89.1%
享保(1716~35)	20	150	7.5倍	88.2%
明和6 (1769)	20	123	6.2倍	86.0%
天明1 (1781)	16	126	7.9倍	88.7%
寛政2 (1790)	15	110	7.3倍	88.0%
寛政12 (1800)	17	131	7.7倍	88.5%
文化7 (1810)	16	111	6.9倍	87.4%
文政3 (1820)	18	110	6.1倍	85.9%
天保1 (1830)	17	104	6.1倍	85.9%
天保11 (1840)	15	96	6.4倍	86.5%
嘉永2 (1849)	16	91	5.7倍	85.0%
万延1 (1860)	18	67	3.7倍	70.5%

占める率は極めて高い。

内田九州男氏が、正徳三年（一七一三）北久宝寺町三丁目の「宗旨手形之人数定帳」により調査された数字では、⁽²⁰⁾同町の総家数一六〇軒のうち家守を含む町人は三四軒、借屋人は一二六軒、すなわち借屋人の軒数は町人の三・七倍に当り、総家数の七九パーセントを占める。これが同町宝暦三（一七五三）の「宗旨人別帳」によれば総家数は一八七軒で、うち家守を含む町人は二七軒、借屋人は一六〇軒、借屋人の軒数は町人の五・九倍に当り、総家数の八五・六パーセントを占める。

また、私がかつて大坂元伏見坂町文政一三年（一八三〇）年の人別帳により調査したところによれば、⁽²¹⁾総家数一六九軒のうち町人（家守七軒を含む）は二六軒、借屋人は一四三軒、借屋人の家数は町人の五・五倍になり総家数の八五パーセントを占めることになる。

大坂では大ざっぱなことをいえば、借屋人の家数は町全体の八割余を占めていたといえる。この借屋人の占める率は、京都や江戸と比較するとかなり高い。⁽²²⁾

ちなみに奈良のばあいには、元禄二年（一六八九）十一月の「和州添上郡奈良総町中諸事覚帳」によれば、町の総家数七三一一竈のうち大家三四二五軒、借家三八八六軒で、借家の占める率は五三パーセントである。

周知のように、屋敷を持つ町人と借屋人とは権利・義務のうえで懸隔があった。その差異を見ておこう。町人は、公式には

何町 何屋何兵衛

何町 何屋何兵衛家守 何屋何兵衛

と称されるのに対して、借屋人は

何町何屋何兵衛支配借屋 何屋何兵衛

と記載される。

借屋人は町政に関しては無権利状態にあった。それぞれの町年寄は選挙によって選ばれたが、借屋人は町年寄の選挙には関与しなかった。因みに、借屋人でも年寄となるようになったのは、明治四年である。すなわち、同年九月一九日の大阪府令は⁽²⁴⁾

市中年寄共、今後借屋人タリトモ当器ノ者ハ、推挙候様申付候事
としている。

借屋人たちは、町政に関与する権利がなかったが、同時に、公役、町役を負担することなかった。

大坂三郷では、寛永十一年（一六三四）六月、將軍家光の上洛に当り、地子を免除された。しかし、町の住人たちに負担がなかったわけではない。一般には、定式・臨時の公役と町役があった。公役とは、町奉行所および三郷惣会

所の経費である。時期によって異なるが、化政期では公役のなかに、御用人足賃、支配打銀、火消方人足賃、江戸拝礼献上物・進上物代および旅費があった。町役は当町限りの諸経費で、諸社寺の初穂料、町奉行所や惣会所への年頭八朔日礼銀心付、帳簿その他雑費、橋の費用・掃除費等さまざまな内容があった。この公役の負担は町人たちにとって重荷であった。南組菊屋町の史料によれば、元文元年（一七三六）、町人たちから惣会所の経費削減の運動があり、その願書のなかで、町人の公役負担が三倍に増え、公役が重くなった分だけ借屋賃が引き上げられ、そのため空家も増え、借屋を売りたいくても公役が重いので買う人もない、と述べている。⁽²⁵⁾

触書や達は、町奉行から惣年寄を経て町年寄に伝えられ、町年寄は町人（家持・家守）に伝え、町人達は「御触承知印形帳」に署名した。借屋人たちは町人から伝達された。

借屋人達の願・訴訟は単独ではできなかった。延享元年（一七四四）の触は⁽²⁶⁾「……向後諸願諸出入訴出候節、年寄家主へも為申聞、其上ニ而年寄之願は月行事、町人は年寄、借屋人は家主差添可出候、無左分ハ願不取上候」と定めた。さらに天保元年一二月一日の触は⁽²⁷⁾「是迄訴状奥印之儀、家持之願ハ所役人致奥印、借屋人之願ハ家主斗之奥印ニ而、訴状差出来候得共、出訴前後懸合ハ、何れニも所役人引請取扱候儀ニ候上ハ、奉行所ニ差出候訴状面ニは、所役人陰ニ相成有之段、如何之風儀ニ候、右牒之不都合ハ、自然と不束之出入を引出候様成行候之間、向後ハ借屋人之願書ニ候共、家主并所役人も可致奥印候」と厳しくした。

訴訟における借屋人の無権利状態が改められるのは、明治五年になってからであった。すなわち同年六月の大阪府令には⁽²⁸⁾

従来府下市民中ニテ町人・借家人ト身分ノ區別致シ、借家人ヨリノ諸願等家主ヨリ申出候向有之、不都合ノ事ニ付、向後銘々ヨリ可申出事

と借家人が単独で訴訟を提起することを認めた。

ここに「身分ノ區別」といつているが、町人と借家人はまさに身分の差であったといえよう。服装の差別の強制は身分の差別の象徴であったといえるが、天保一三年（一八四二）八月二七日の触書は家持の町人・借屋人・召仕の下人下女の服装について定めて「借屋人へ、たとへ男女多召仕候程之者ニ而も、其身并妻子共、縮緬ハ小切たり共堅不相成事、但、裏長屋之者ハ毛綿ニ限候事」としている。

借屋人が貧しいとは限らない。右の触書にもあるように「男女多召仕候」借屋人もあった。

前記のように町人の負担が重かったので、敢えて家屋敷を持たず借屋人であることを選ぶものがあつた。寛政五年（一七九三）四月二三日の口達「三郷町中町入用并家賃共相増候趣風説ニ付、家主共は家賃減遣、借屋人共儀決而滯らせ間敷利害之事」の但書に「吝嗇之もの心得違ニ而、家屋敷持候よりも、借屋住居之方勝手宜敷と心得、金銀貯候者も、近頃追々借屋人ニ相成候由及聞候、誠ニ本意ヲ取失ひ候次第ニ候、以来金銀手廻候者ハ、家屋敷致所持候様、心懸可然候事」と戒めている。

借屋層は流動的で、乾宏巳氏の調査によれば、⁽³⁾定着しているのは全体の三分の一程度であり、他は都市細民であつた。したがって、借屋人が家賃の低いほうに流れるのも自然のいきおいであつたであらう。天保五年（一八三四）一月、三郷火消年番町年寄連判で「近年市中統村方建家相増、市中之障ニ相成候、尤是迄之建家ハ致方も無之、向後ハ新規建家之儀、御差止被仰付度出願之事」との願が出された。⁽³⁾これによれば、近年町続きの村方に借屋を建てる者が増え、それらの家賃が安いものだから、市中の借屋人がそちらに移り、市中には明借屋が増えた。村方の建家のばあい負担は御年貢銀のみで、川浚冥加金・御用人足賃金・并火消人足賃金等の諸入用がかからない。殊に下尿の売上代は村方の方がはるかに有利である。そのようなことで「在領段々繁盛仕、市中近來明家多有之段、相歎罷在候」と

いうのである。そのなかで「元来百姓之儀は、土地より作物取入御座候儀を、丁人共同様之心得を以、利徳ニ可相拘義ニ而は無御座奉存候、丁人共儀は、借屋店貸等之利益ヲ重ニ仕、外ニ土地より取入もの等無御座候」と述べている。町人は、百姓のように土地から作物を得るように利益があるのではなく、借屋の家賃収入が生計のもとだといふのである。

このような借屋人たちの間に、連帯あるいは横の組織は成立しにくかったと思われる。『三貨図彙』の著者草間直方は享保一八（一七三三）年の頃に「米穀高値ニ付、貧窮之ものへ救ひ取らせ候もの共之、奇特之事ニ御座候、然ル処其志を不弁、却て貪り事ヲ申掛、或ハ借屋人とも申合、家主（之）宿代等払不申、又ハ町々年寄救ひ取捌方輕き趣、寢從^{ねたり}こと申族有り之様ニ相聞へ、甚不届之至リニ候、云々」と伝えているが、同年正月一日に三郷町中に「米穀高値ニ付、町中貧窮之者へ救とらせ候者共有之由、奇特之事ニ候、然ル所其志をわきまへず、却而貪事を申、又ハ借や人共申合、家主へ宿代難済抔と申込、丁々年寄取捌悪敷く候旨、ねたり事を申族有之様相聞へ、不届之至ニ候、左様之もの有之候而へ、救ひ致候障ニ相成候間、急度咎メ可申付候」と触れ出されている。⁽³⁴⁾

管見の範囲では借屋人たちの一揆はこれ以外にしないし、少なくとも触書の表面に出てくることはない。借屋人の連帯ないし組織といったものはこの時期には極めて困難であったであらう。

(2) 家請人仲間の成立とその経過

享保一七年（一七三二）年正月、家請人仲間は左の一札を差し出した。⁽³⁵⁾ いささか長文ではあるが本稿にはかなめとなる資料であるから全文を引用する。管見の限り、この文書が家請人仲間に関する資料の初見である。

差上申一札

一 大坂町中借屋請人之儀、此度私共願上、願之通り被仰付候ニ付、借屋明ヶ退、私共方へ引取候者入置候ため、大坂町うちニ小屋場沓ヶ所、私共る借受、右小屋ニ引取人共入置候儀、御聞届被下候事

一 家請之儀、親類又は懇意之間柄ニ而請判仕候分は、私共少シも差構申間鋪事

但、判賃取候斗ニ家請商売之様ニ仕候者、私共之外御差止可被下候事

一 請判形いたし候刻、親類有之者は不及申、無縁之者も、しるべ之者る下請合を取、是迄も判形致来り候、彌向後相改下請を取、紛敷儀無之様可仕候、私共所々ニ而組合を拵置、互ニ吟味仕、諸事不筋之儀無之様可仕事

一 家主る借屋明させ候借屋人、当地ニゆかり無之老人・病人・はちひらき之類、当日を送り兼候者は小屋ニ入置、惣家請人として育可申候、尤親類または下請人等有之者は、其方へ相渡シ可申候、然レ共萬一親類下請人等当分差支有之、及難儀候ハム、先私共方へ引取、小屋ニ入置、重而其者勝手次第借宅致させ、何分借屋明之願請不申様可仕事

一 惣而家明御願可申儀断り来り候ハム、組合之請人共立会、何方へ成とも早速為引越、家明御願請不申様可仕事

一 家主る家入用ニ付、家明之儀申来候ハム、早速家明させ可申候、自然借屋人家主へ対し、不埒之品有之ニ付、家主る家明之儀申来候類は、品ニ寄、家主へ相詫遣シ、家主得心仕候ハム其俣差置、不得心に候ハム家明之願請不申、家明させ可申事

一 家賃銀相滞、家明之儀家主る申来候ハム、家賃銀は其家請人る相弁可申候、若不埒ニ候ハム、相殘惣仲間之もの共る急度相立、借屋人は勿論私方へ引取、家主る願請不申様可仕事

一 惣而小屋え引取候もの之儀、憐愍を加養育仕、不仁之仕方仕間敷事

一 私共家請ニ相立候借屋人ノ請候判錢之儀、表店借相応ニ暮候者ハ、一節季ニ四拾文ツム、沓ケ年ニ貳百文、表店ニ而も輕キ暮之ものは、沓節季ニ貳拾文ツム、沓年ニ百文、裏店ニ居候者は一節季拾六文ツム、沓ケ年ニ八拾文請取之来り候、此外は其者心任次第請来候、貧敷暮候もの判錢は用赦仕来候、此以後も右之通り請取、右之外沓錢も貪ケ間敷儀曾而仕間鋪候、且又只今迄、右書面ノ判錢少ク渡シ来り候もの共有之は、此分は唯今迄之通判錢受取之、少も相増申間鋪候事

一 私共方え引取、小屋へ入置候もの共、萬一御尋之儀御座候節は、早速召連罷出可申、為其小屋支配人付置、引取候者ども帳面ニ記置、先々え引渡候ものは行先付置、または他所へ引越候もの共は御断申上、御番所引越帳ニ付可申事

一 仲間之内仕方不埒之者有之候ハム、互ニ吟味仕、御断申上、仲間除キ可申事

右之通、少シも違背不仕、勿論貪ケ間鋪儀仕間敷候、自然相背候もの有之候ハム、如何様之越度ニも可被仰付候、為後日連判依而如件

子正月

宛先と差出人を欠くが、家請人仲間が奉行所に提出した書付に相違ない。

この家請人仲間が形成された経過については、残念ながら現在のところ何の手がかりもない。通常の手続から推測すれば、このような願人があり、奉行所は町人達にその是非について意見を徴し、町人達の賛意を得て許可をしたものと思われる。

内容を整理してみよう。

① 親類や懇意の者が請人となり、請判をするのは従来のもまでよい。しかし、判賃をとって請人となること営業とすることは我々以外には禁止されたい。

② 請判をする場合は、確かな親類かするべの者を下請人とする。

③ 家主が借屋を明けたいときは、組合の請人が立会い、早速借屋人を転宅させる。家主から家明の訴訟などしなくてもよいように処理する。

④ 借屋人に不都合があり、家主が借屋人を出したいと言ってきたときには、請人から家主へ詫びを入れ、家主が納得しなければ借屋人に家を明けさせる。

⑤ 家主が、家賃が滞納されているので家を明けさせたいと言ってくれば、家賃はその家請人から弁償する。できなければ、請人仲間から必ず弁償する。借屋人は当方に引取る。

⑥ 判銭は、

表店で相応に暮らす者は 年二〇〇文

〃 軽き暮らしの者は 年一〇〇文

裏店の者は 年八〇文

とする。これまで、もっと安かったものは従来どおりとする。その他は話合いで決める。貧しい者からは取らない。

⑦ 借屋を出され、我々が引取った者を住ませるため、小屋の場所を借りる。家を出された借屋人は、親類や下請人があればそちらに渡す。差支えのあるもの・当地にゆかりのない老人・はちひらきの類で困窮者は引取屋に置き、惣請人で面倒をみる。

⑧ 仲間のうちに不都合な者があれば相互に吟味し、仲間を除名する。

家請人仲間は、一種の借屋人の信用保証組合である。借屋請人の義務の一つは、借屋人の身元の保証であったが、この一札によれば、借屋人の身元の保証は親類ないしはしるべの者が下請人としてこれに当り、ここにいう家請人は家賃の保証および家明け等の処理を引き受けることにあった。

右にいう借屋請人仲間の引取小屋は天満にあった。享保一九年（一七三四）成立の『大坂三郷記録』⁽³⁶⁾中「八、天満助成地」の項に八口の土地があげられているが、そのなかに

一 耆反九畝七歩 観音寺屋敷

とあり、

右反畝之内、観音寺屋敷耆反九畝七歩之内、耆反三步は道頓堀入堀ニ成候替地ニ遣減、残る九畝四歩ハ三郷家請人願候引取場所ニ成候、引残地子銀四百八匁八分、右地子銀天満惣会所え毎年取集、天満組町中支配銀仕候事とみえる。この引取小屋は、家請人仲間が許可されると同時に設けられたものであろう。さらに、文政一二（一八二九）から天保三年（一八三二）頃の調査により成立した『手鑑』⁽³⁷⁾の「三郷家請人数」の項には

一 家請人 三拾七人

引取小屋

天満助成地観音寺地屋敷地面之内

表口四間 裏行八間半

右家請人共自分ニ建置、家主より借屋明ヶさせ候者、当地ニゆかり無之老人・病人・当日送り兼候者引取候節

入置候

とみえている。これからみると引取小屋は、二七四坪の敷地に三四坪の建物であったようである。

家請人の人数はここには三七人とあるが、その人数には変遷があった。宝曆九年（一七五九）の達には「三郷町中家請人、是迄五拾軒余候処、近年減少四十六軒に相成、云々」とみえるが、寛政元年（一七九一）一〇月一日の触書には「家請参拾七人云々」とあるから、その人数は漸次減少したようである。

左の引取証文は、一般に家請人が借屋人を引取ったさいのものであるが、三郷家請人が引取小屋に引取ったさいも同様の証文が作成されたことであろう。

引取申一札之事

一 其元借屋何屋誰并御町人別之通、諸色諸道具共、此度我等方え引取申処実正也、然ル上は、以来如何様之儀有之候共、此方え引請、其元え少も御難儀懸ケ申間敷候、為後日人別引取一札仍而如件

年号 月

何屋 誰殿

以下、家請人仲間の制度の推移を辿ってみよう。

家請人仲間が成立して三〇年を経ないうちに、新たな家請人の願いが出てきた。

『大阪市史』第三巻は、宝曆九年（一七六〇）三月五日の項に、以下の内容の補達をのせている。⁽⁴⁾

先日、願人があつて、これまで家請人は下請人をとっているから借屋人の支出が多くなる、そこで下請人を取らずに家請人を引き受けたいと申し出てきた。そこで、奉行所は借屋人と家持町人たちの意見を聞くことにした。

借屋人たちは、出銭がかさむため難儀すると聞か、ついではこの度の願人の申し立てたように、「下請をも不取引受候事ニは、やはり家請人有之方勝手ニ宜候哉、又ハ家請人一向無之方勝手ニ宜、決而差支等無之候哉。」

家持町人たちは、家明について奉行所には訴えず直ちに家請人へ連絡してきたから、家請人はあるほうが勝手がよいであろう。この度、願人があったので改めて尋ねるが、家請人はあったほうが勝手がよいか、または家請人は無いほうが良く差支迷惑の筋はないか。

各町は、借屋人および家持町人の意向を署名捺印して書かせ、それぞれ封じ目に印形し、来る九日までに惣会所に提出するように、ということであった。

ところが、『大阪市史』は、同年一月一六日付けで、左の東町奉行所の達をあげている。

一 三郷町中家請人、是迄五拾軒余候所、近年減少四十六軒ニ相成、相勤来り候事

一 此度家請人之儀願人有之、判銭減少相勤候事、右之通ニ而は町々借屋人ハ出銭減少致シ、勝手ニ可相成候様被存候事

一 家持之儀は存寄いか、右両様承札、来ル二十日までニ組合切ニ書付相認、東御番所え差出候様被仰渡候事
卯十一月十六日

表店 三十文 裏店 二十文

右ハ最初借り請候節受取、

表店 八文 裏店 四文

右は節季毎受取候積り、

右之通新規願人三人

この達と前掲三月の記事との関係は不明である。

それからどういふ経緯があつたのか、結局これらの願人の申出は認められなかった。

翌宝暦一〇年四月一八日、家請人仲間は左の一札を提出した。⁽⁴³⁾

差上申一札

一 大坂三郷家請之儀、判賃引下ケ請負度旨、追々願上候者有之ニ付、被遂吟味之上、私共儀年来仕来り候渡世ニ離候事ニ付、御憐愍之上、新規願之方は不被及御沙汰、其儘私共え家請被仰付被下候段被仰渡、難有仕合ニ奉存候、右之通被仰渡候上は、判賃可成たけ引下ケ、借屋人共之出銭随分致減少候様可申合候、判賃懸りのもの等致高値、過分之礼物取候歟、または最初家請御免被成下候節、被仰渡候趣、少シニ而も相違之仕方有之候ハ、家請被召放、其節咎可被仰付候間、嚴重ニ相守、心得違無之様可仕旨被仰渡、奉畏候、依而如件

同年六月一日の達は、家請人賃錢を⁽⁴⁴⁾

表借屋十畳以上之分

一ケ年ニ是迄百四文之処九拾文

裏借屋九畳六六畳敷迄之分

一ケ年ニ是迄八拾文之所六拾五文

同五畳敷以下之分

一ケ年ニ是迄八拾文之所四拾文

と引下げになつたことを公表した。

明和元年（一七六四）八月八日、家請人仲間は、新地における新建屋の分の家請も認められ、冥加として銀五〇枚を上納し、判賃の値上げや不実嵩高の仕方をしない旨を述べ、今後新町家が増えれば冥加銀を増加する旨書上げてい⁽⁴⁵⁾る。明和八年（一七七二）には、冥加銀一〇枚の増加を命じられ、毎年銀六〇枚づつ上納することになつた。⁽⁴⁶⁾

寛政元年（一七八九）一〇月、家請人仲間が差出した書付によれば、判賃引下について奉行所から指示があつたら

しく、「向後表借屋は上中下の差別なく、老軒ニ付唯今迄三月・五月・七月・九月・十二月五ヶ度受取来候錢之内ニ而、老ヶ度ニ三文ツム之積、老ヶ年ニ拾五文引下ケ、裏借屋は右同断、一ヶ度ニ六文ツム之積、一ヶ年ニ而三拾文宛減可申候」と判賃の減額、最初借屋人から受け取る祝儀錢は従来通り受け取るが、家主・家守が替わったとき受け取ってきた祝儀錢を廃止し、錢相場が以前のように錢一貫文につき一匁になったときは又々引き下げを考慮すると述べ、且つ今後株の譲渡、住所の変更、名前替え、印形替えのときは早速奉行所にでかけ帳面を改めることを確認している。ここに錢相場が一匁になればといっているのは、寛政以来錢相場が下落し九匁代を上下し、一〇匁をこえたことがなく、時としては八匁代に下落したという。

天保の改革にさいし、株仲間が解散させられたが、家請人仲間は残された。

天保一三年（一八四二）八月二三日の触書⁽⁴⁸⁾は左のように述べている。

此度問屋唱方等之儀ニ付、御触達之趣を以、大坂三郷并町統在方家請人之儀も、株仲間等唱候儀差止、冥加銀も不及上納旨申渡置、猶又取調候處、右家請之儀、先年願請候以後、右渡世致候者人数ニ引当ケ所割ニいたし、家請判先と唱、銘々請持場を差定有之候ニ付、たとへ親類懇意之間柄ニ而、請人ニ相立遣候者有之候而も、何れ右場所所持之家請人、請判不致候而へ、家貸借不相成振合ニ押移、借屋人共ニおゐても、二重ニ受人相頼候仕儀ニ至、手狭ニ相成候而已ならず、家請判料之失費も有之、及難儀候事之由相聞、前段御触面ニ差障り候付、家請渡世之儀、更ニ可差止處、右ニ而ハ当地ニ人主無之者、家貸借ハ勿論、外借屋人家入用有之、家主ノ家明之義申出候節、取扱方不無理相成、旁差支候趣ニ付、此後も右渡世之儀、只今迄之通据置、家請判先と唱、夫々ケ所持候儀差止、以来家請人共え手寄、請判之義頼来候者有之ハ、銘々勵次第判料引下ケ、請負可致候、

此外親類懇意之間柄ニ而、請判いたし遣候者有之分ハ、家請渡世之もの請判致候ニハ不及候間、右之者ニ不拘、相対次第家賃借可致候、尤其儀を家請人共差障り申間敷候

但、右家請渡世之者方ニ、取補理有之引取小屋之儀、銘々軒別ニ相成候而ハ、夫丈雜費相掛、自ラ家請判料引上ケ候道理ニ付、右小屋之義ハ、唯今迄之通家請人共相持ニ致候共、相対次第可致候

一 町々借屋人共儀、家主エ家明渡候節、差向可手寄方無之者ハ、家請小屋入と唱、前書家請渡世之もの引取小屋入、夫切ニ而一旦元居町名前消候儀を存量、近來借金銀負候者、家主家請人等馴合、態と家明之儀申出貰、或家請小屋入等いたし、濟方遁候巧いたし候ものも有之哉ニ相聞、以之外之風儀ニ候、右ハ最前相触候身躰限相渡候もの同様、不所存之至ニ付、是又急度人前を相憚、格別ニ辛苦いたし、可稼出筈ニ候上ハ、右躰家請小屋入いたし候者、追而以前之通、町名前差出、借宅を構候迄ハ、向後男女共平日藁草履之外、其余之履物ハ勿論、男女共雨天之節傘下駄等相用候儀差止、簀・笠・桐油・合羽を着、可致往来候、且銘々親類身寄之者方吉凶之場所え列座致間敷、其上男ハ吉凶平日共、上下・袴・并羽織をも着用不相成候間、其旨を存、如何ニも恥辱を弁、家請小屋入いたし候儀、輕々敷相心得申間敷候、自然此上ニも右小屋入之義ニ付、巧之取斗いたし候もの相聞ニおゐてハ、早速召捕、可処罪科条、所之者共も兼而心を付、右躰之族無之様可相改候

但、本文之通申渡候迎、実々家入用之義有之歟、又ハ家賃銀等相滞、家主より家明之義申出候事ハ、聊不及遠慮候、借屋人又ハ家請人共ニおゐても、右に事寄、家明難渋いたし候儀ハ勿論、家賃銀等為滞申間敷候、

夫々家主も成丈家賃銀引下ケ可遣候

この触書によれば、家請渡世を存続させる理由は二つあった。第一は、当地に人主のないものの家の賃借に不便であること、第二は、家主が借屋人を出すとき不便になることである。第一の理由を見ると、人主ニ下請人となる「親

類又は懇意の者」がなくても、借屋の請人は家請を渡世とする者の判を認めていたことを示している。

明治三年三月二四日、大阪府は「諸証文定則無之より、不都合之証文取置候ものも有之候ニ付、今般改正致候間、以来雛形之通漸々相改候様可致候、云々」として「諸証文雛形定則」を定めた。そのなかに借屋証文⁽⁴⁹⁾があるので引用してみよう。

借屋請状之事

一 此誰と申もの、生国より能存知、慥成ものニ付、我等請合相立候、貴殿貸家借受候処実正也、家賃之儀ハ、毎月晦日無相違相済可申候、若相滞候ハ、受人方より御勘定可仕候、家御入用之節ハ、何時成共、早速為明渡可申候、其節故障等申間敷候

一 御公儀様御法度之儀ハ不及申、時々御布令之趣、堅く為相守、博奕・諸勝負事・隠売女取扱、其他浮浪之輩潜伏為致、或ハ人寄、其他親類たりとも無断一宿為致申間敷候

一 代々何宗ニ而、寺受状並村役人より之稼切手、受人方ニ取置候間、御入用之節差出可申候、都而此誰儀ニ付、如何様六ヶ敷儀出来致候共、我等引受埒明、少しも御難儀相掛ケ申間敷候、為後日仍而如件

何町

年号月日

請人 何屋 誰 印

何屋誰殿

何国何郡何村百姓誰同家
家借り主 誰 印

この時期には、なお旧幕時代の家請人の制度が生きていた。

家請人の制度が廃止されたのは、明治四年になってからであった。すなわち同四年四月晦日に左の大阪府令⁽⁵⁰⁾が出さ

れた。

今般四組家請人令陞止候条、向後借屋貸渡申候節ハ、親類・身寄又ハ懇意之もの請人ニ取可申、右ニ付家明出入之儀ハ、改而当人並受人相手取訴訟可致事

とみえている。

(18) 阪本平一郎・宮本又次編『大阪菊屋町宗旨人別帳』。

(19) 中野喜雄「大阪の町法」(『大阪町人相続の研究』所収)。

(20) 内田九州男「近世大坂の大衆文化について」『歴史評論』四五三号五三・四頁。

(21) 大坂元伏見坂町人別帳、小西平八郎氏所蔵。

(22) 江戸のばあいは、家持と店借人の間に地借人があつて、単純な比較はできないが、松本四郎氏が文政十一年の「町方書上」により調査されたところによれば、店借率の高いところでは、深川八二・五%、鮫河橋八〇・九%であり、低いところでは下高輪門前地の五八・〇%や麴町の五九・六%となっている。壬申戸籍を集計して計算された明治初年の店借の比率は、市街地になる第一大区から第六大区では平均五五%である。

(23) 奈良県立奈良図書館所蔵「藤田文庫」所収。

(24) 『大阪府布令集』第一卷三九三頁。

(25) 乾宏巳『なにわ大坂菊屋町』二頁。

(26) 「致出訴候は家主年寄之申聞置、願出候節は家主年寄可出事、并出入ニ不拘ものは不可出事」『大阪市史』第三卷、五〇三頁。触一八九九号。

(27) 「金銀出入其外所出入ニ付、去申年九月触渡置候引合日数之儀、差止、前々之仕来ニ相復可申候間、所役人心得方之事、并向後は借屋人之訴状ニ候共、所役人奥印可致候事」『大阪市史』第四卷、九五一頁。触四九二九号。

(28) 『大阪府布告令集』第一卷、五五四頁。

(29) 「家持之町人・同居人・下人・下女・御用掛・諸家用達立入之者・寺社家・医師・儒者・山伏・座頭・瞽目・能役者・食盛女・歌舞妓役者・人形遣等分限相応之衣類ヶ條書之事」『大阪市史』第四卷、一六〇〇頁、触五五一六号。

- (30) 『大阪市史』第四卷、一五六頁、触三六六七号。
- (31) 乾、前掲、
- (32) 「近年市中統村方建家相増、市中之差障ニ相成候、尤是迄之建家ハ致方も無之、向後ハ新規建家之儀、御差止被仰付度出願之事」『大阪市史』第四卷、一一四七頁、参考一六三三。
- (33) 『大阪市史』第五卷、八一九頁。
- (34) 「米穀高値ニ付、救致候者有之処、借屋人共申合、貧事申間敷事」『大阪市史』第三卷、三三二頁、触一四九七号。
- (35) 「三郷家請人判形帳前書」『大阪市史』第五卷、七四三頁以下。『大阪市史』第三卷、三一二頁以下『家請人数定之事并一札拾老ケ条之事」
- (36) 『大阪三郷記録』大阪市立大学付属図書館書藏。
- (37) 『手鑑・手鑑拾遺』五〇頁、大阪市史編纂所編『大阪市史史料』第六輯。
- (38) 「家請人出願之事」『大阪市史』第三卷、六三四頁、補達九二号。
- (39) 「三郷町々借屋人共より家請人共え、月々差遣候出錢減少、并家主家守代り等之祝儀相止可申事」『大阪市史』第四卷、三八頁、触三五四四号。
- (40) 「引取申一札之事」『大坂要用録』三諸証文の部（『古事類苑』政治部三、一三〇五頁所引）。
- (41) 「家請人有無之都合御尋之事」『大阪市史』第三卷、六二三頁、補達八七号。
- (42) 「家請人出願之事」『大阪市史』第三卷、六三四頁、補達九二号。
- (43) 「差上申一札」『大阪市史』第五卷、七四五頁。
- (44) 「家請人賃錢引下ケ之事」『大阪市史』第三卷、六四二頁、達五八三三。
- (45) 「差上申一札」、「株仲間名前帳前書」所収、『大阪市史』第五卷、七四六頁。
- (46) 『大阪市史』第五卷、「株仲間名前帳前書」所収、七四六頁。
- (47) 『大阪市史』第五卷、「株仲間名前帳前書」所収、七四六頁。
- (48) 「大坂三郷并町統在方家請人、只今迄之通据置、家請判先と唱、銘々持場を定候儀差止候事、并家請小屋入致候者之衣類履物等、身代限相渡候者ニ可準事」『大阪市史』第四下一五九五頁、触五五一三三。

(49) 「借屋証文」『大阪府布告令集』第一卷、二五九頁。

(50) 『大阪府布告令集』第一卷、三三六頁。

二 京の家請会所

(1) 町々の借屋人規制

京の町でも町制における借屋人の地位の低さは大坂のばあいと変わらない。⁽⁵¹⁾ 詳説は避けるが、町の自治に参加し、年寄・五人組としてその運営に当るものは家持に限られていた。

さきに、京では町々の自治が強く、それぞれの町で規約を設け、その中には借屋人に関する簡条があったことを述べたが、近世以降も各町々で借屋人をめぐる規約をもつものが少なくなかった。以下京都市歴史資料館所蔵の写真や『史料京都の歴史』、日本歴史地名大系(二七)『京都市の地名』に導かれながら、上京・中京・下京の町からそのいくつかをあげてみよう。

室町寺之内上ルの下柳南半町の寛政八年(一七九六)「定条目」は一三条からなるが、その第一〇条に⁽⁵²⁾

一 借屋、貸人家主より申来、其上御請人被参候は年寄得と吟味之上、町中へ書付相廻し可申候、万一外ニ聞及候義有之候ハ、無遠慮役人迄申込可申事

とある。この条目の最後には「右条々古格之通ニ当用を相加え、此度町中得心之上致連印、初汁毎ニ読上、急度可相守者也」としている。

室町中立売西入の中立売町の「定」全一八条は第一六条に左の如く定めている。⁽⁵³⁾

一 借屋請人之事、兩人宛吟味之上ニ而慥成者可御取候、判形八十人組・行事・家主より見せニ可被遣事、請人無事ニ居候事ハ毎月家主より改メ可申事

同上ノ町の宝永二年（一七〇五）の「町式定」全四九条中第一六条以下に⁽⁵⁴⁾

一 借屋之事、町内ニ肝煎取申度事ニ候、借主之様子相尋、借申度事ニ候、肝煎無之方ハ年寄・五人組寄合、能吟味仕、借可申候、其上後家之借屋え屋まめ（寡力）を借中間敷候

付、顔見せ昼仕、夜致間敷候、時行事、寺請迄取可申候、何方ニ参申由、送状を取、又宿替致候ハ其行所を聞届置可申候

一 借屋之町かね、三匁ハ用人銀也、もちくはりなし、宿酒なし

一 町内之借屋、町内ニ参申事、先之家主え可申候

付、年寄・五人組え相断、様子吟味仕可申事

との三条を置いている。

室町通上長者町下ル清和院町、寛永一六年（一六三九）の「定法度之事」全一八条は「借屋之事」として⁽⁵⁵⁾

一 請人ニ家持、寺請取可申事

一 町へ之礼錢、酒も、盛申す間敷事、但、其組兩隣へ案内可申事

の二条を設けている。この町法は万治二年（一六五九）「町中定之事」に改められるが、ここでは⁽⁵⁶⁾

一 借屋之又借し仕間敷事、但親兄弟其外親しき仁ならば、年寄兩隣へ断置可申候事、若一ヶ月式ヶ月ニ而も居

申候ハ、請人を立可申候、其人帰候ハ其通又町中へ断可申事

一 借屋置候は、請状を取候而後ニ為越可申候とある。

室町夷川下ルの冷泉町では天正一六年（一五八八）に⁽⁵⁷⁾

かり家之物あるにおいては、御しゆく（宿）老衆へ安（案）内申、御かてん（合点）ニおいては、二百文の御樽出申へき事

同町寛政九年（一七九七）の定は⁽⁵⁸⁾

町内店借之仁在之候ハ、商売、人筋、名前等、以書付前広ニ聞合、町分差支有之候ハ、其趣相糺候上相極可申事

尤町分へ出銀 三匁

会所へ式匁遣候事

としている。

寺町御池下ルの下本能寺前町の文禄三年（一五九七）の「定」全七条は三条を割いて左の箇条を置いている。⁽⁵⁹⁾

一 借屋之事、家主有りなから、かし被申ニ付而は、不及是非候、家主他所ニ於有之は、かりての善悪ヲ被相極家主於同心ハ、町内へ披露可被申事、其時各罷出、両請自町堅相立可置事

一 借屋之人不寄知音親類、又借シ於被申は、見付聞付次第、家主へ相とゞけ出可申事、^{付一夜とまりの儀不}及申、堅停止可仕事

一 借屋之人見しられ、酒の代として五升つゝ可被出事

同年「定条々之事」には⁽⁶⁰⁾

一 借屋之事、慥成請人無之は、不可借事

とあつた。

柳馬場御池下ルの柳八幡町、享保元年（一七一六）の「諸事町中式目之定」は⁽⁶¹⁾

一 借屋借し申候は其談合無極、以前二年寄方え家主より断可申事

借屋借シ申間敷事

- 一 藍染屋、一 湯屋、一 風呂屋、一 薬種屋、一 鍛冶屋、一 木地屋、一 薄屋、一 竹屋、
- 一 なめし皮ふすへや、一 突米屋、一 油しめ屋、一 材木屋、一 桶屋、一 飛脚屋、一 鋳物屋、
- 一 合羽屋、一 打錦屋、一 馬屋、一 道具、夜市、道具之会同取売

右之外ニも人之きらひ申職商人、又ハ火之用心悪敷家業人ニハ借し申間鋪事并家為買申事も、右ニ同前之定也としてゐる。このように借屋人の職業に制限を設けている町は他にも少なくない。

享保一一年（一七二六）、二条西洞院町の「定」には⁽⁶²⁾

一 借屋賃候儀は、借り主口入等聞届ケ其旨ヲ書付、町中ニ指合なく候敷、構有之候ハ、無用ニ致、別条なく候は相究メ可申候、自今ハ口入之義、家持之外無用ニ候、口入宅替申義も可有之候事

一 向後借屋請状ニ口入判見等名書差加可申候、念之入可被申候事、若又借屋宿替申候ハ、引越申所書付町中

え可差出候事

一 前々より正五九月十日ニ借屋中判形取置候、自身不罷出、或は式三軒も一人して預り出候儀、不屈ケに候、向後は銘々持参可有候、用人尤可相触候得共、家持・家守より堅可申候、自身持参申候様可致候事とある。

綾小路寺町西入ル足袋屋町、慶安二年（一六四九）「式目之覚」は借屋人について左の規定を置いている。⁽⁶³⁾

一 借屋請狀年寄へ理り 其当り行事 吟味仕可取こと

一 借屋請人 上ハ二条ヨリ下 下ハ五条ヨリ下

東ハ河ヨリ西 西ハ堀川ヨリ東

一 借屋男やま（もカ）め 家ヲ借シ申間敷こと

一 借屋出銀 銀子五匁 但シ役人ニ三分

年寄方へ銀子壹匁

一 裏借屋出銀 銀子貳匁五分 但シ役人ニ二分五厘

年寄へ銀子五分

それでは、京の町で借屋人は町内でどれほどの率を占めていたのであろうか。無論ここでも各町により、また時期によつてその比率は異なることはいふまでもない。

比較的まとまった統計的数字としては秋山国三氏等の研究以外に⁽⁶⁴⁾しらない。ここでは、三条通室町から姉小路にい

第2表 借屋人の百分比
(※印のみ弘化3年)

	衣棚北町	衣棚南町	突 抜 町
天明 7 (1787)	64.3	57.1	
寛政 9 (1797)	50.0	55.0	
文化 4 (1808)	50.0	55.0	
文化14 (1817)	64.3	52.6	
文政10 (1827)	61.1	47.4	
天保 8 (1837)	78.7	35.3	78.1
弘化 4 (1847)	71.4	50.0	※82.9
安政 4 (1857)	71.4	76.2	81.1
慶応 3 (1867)	50.0	72.2	

たる道を挟んで南北に向かい合う衣棚北町と衣棚南町、その中を北に通る新町を挟む突抜町を取り上げておられる。これは京のほぼ中心部に当る。衣棚南北両町は天明六年から八二年間の、突抜町では天保七年から二九年間の人別改帳を伝えている。秋山氏らは家持数の占める比率を一〇年毎にとって表示しておられるが、同表により借屋率を作成したのが第2表である。

京都市歴史資料館には断片的にいろいろな町の人別帳の写しを所蔵しているが、そのなかから無作為にいくつかを拾ってみると、京の中心部では二〇数%から六八%までくらいであった。尤も文化二年(一八〇五)八月七日の触に「端々借屋多之町分ハ尚更、家持多借屋無数之町中云々」というように、⁽⁶⁵⁾町の中心部は借屋は少なかったようである。中心から外れたところではどうであったか。

五辻通浄福寺西入ル上ル姥ヶ榎木町、文化七年

(一八一〇)、総家数三九軒内家持七軒

(七五・九%)

室町頭下柳原南半町、天保六年(一八三五)、

総家数二二軒、内家持六軒

(七二・七%)

大宮通御旅所下ル二丁目安居院筋違橋町、天保

一四年(一八四三)、総家数五八軒内家持二二軒

(六五・六%)

西京上之町、嘉永二年(一八四九)、

総家数三六軒、内家持一四軒

(六一・一%)

上立売堀川西入ル芝薬師町、安政三年(一八五六)、

総家数四五軒、内家持一六軒

(六四・四%)

千本今出川上ル上善寺町、慶応二年(一九六六)、総家数三九軒、内家持一〇軒

(七四・三%)

明治六年(一八七三)の調査⁽⁶⁶⁾では、上下両京・伏見の全戸数六万八九〇〇軒のうち家持二万四三三六軒、借屋人の戸数は六四・六八パーセントということになる。これらの数字を見ると、京で借屋人が占める率は大坂よりもかなり低かったことは確かであろう。

(2) 京の家請会所

さて、京の町で、いまここで問題にしている家請人の制度について言及した報告は、管見の限り、秋山国三氏の『公同沿革史』以外に知らない。氏は「請負を以て借屋人の請人たらんことを出願せるものがあつた」として後に述べる享保一七年一月八日の触と明和七年の出願をとりあげて簡単な紹介をし、それらが市民の反対にあい実現あるいは認可されなかったとしておられる。⁽⁶⁷⁾しかし、『京都町触集成』を通覧すると経過はそう簡単ではないようである。以下その経過をおうてみることにする。

大阪で家請人仲間が公認されたのは享保一七年一月であつたが、その年の一一月になって、京都でも家請人の願いが提出された。⁽⁶⁸⁾願いの通り認められたならば、左の書付を洛中洛外の町々に渡すというのである。

家請人仕方覚書

一 此度中洛外町々借屋請之儀、表借屋を壹ヶ年ニ壹匁五分宛、裏借屋を壹ヶ年ニ七分五厘宛、但三分、壹分五厘宛、年中五ヶ度ニ請取、其外いか様之出入失却有之候而も、入用掛り物杯ヲ申立、家持衆中亦借屋人々

割掛申間敷候、尤後々迄御定之外少ニ而も相集候ハ、御公儀様御咎可有御座候、且又家主衆中并借屋人双方為ニ相働候事御座候とて、酒肴青物等礼義堅請不申候事

一 武家方并堂上方御家来衆中ハ、是迄之通御相对次第二可被成候事

一 洛中洛外ニ方角分チ、十六ヶ所請判人式人宛相定置可申候間、家持衆中貸被置候家入用之儀御座候敷、又ハ借屋人之所存、御町中并御家主御氣ニ不入事御座候而家明さセ度思召候ハ、早速右向寄之請人方へ御申聞可被成候、外ニ借屋聞立早々家明さセ可申候、若急ニ御座候ハ借屋人妻子諸道具共、先請人方へ引取家明さセ相渡可申候、尤明屋拵置候而何ヶ所ニ而も差支無之様ニ可仕候、勿論御家主借屋人勝手づくの家替ハ、是迄之通相对次第二可被成候事

一 宿料借之儀ハ売掛預銀环と違ひ、催促被成候内ニも又々相重り、家主衆中御難儀之筋ニ御座候、縦五ヶ月三ヶ月相滞候而も、借屋人之仕方悪敷候ハ、家明さセ候様ニ御申可被成品可有御座候、若不埒之儀被申候借屋人御座候ハ、早速御申聞可被成候、品能相済候様ニ引請埒明ケ可申候、宿料さへ相済候ハ家替ニも不及、双方勝手宣候様ニ可被成候、ヶ様之世話無之とて御家主ハ不及申、借屋人よりも言葉之御礼ニも不及候、且又町々宿料直段上ヶ下ヶ之儀ハ相对次第二可被成候、家請人方ニ少も相構申儀無御座候

一 惣而家貸シ借之相对相極候而、御勝手次第ニ請判取ニ御越可被成候、右十六ヶ所請判所之内、方角近キ所へ御出可被成候、早速印形可仕候、いか様之儀ニ而も二度足をはこばせ申間敷候、且又請狀認候事、御隙入も御座候ハ案紙御持參可被成候、相認進シ申候

一 何事ニよらず借屋人之儀ニ付、家主御役害ニ成可申品出来候ハ、早速御申聞可被成候、請人罷出埒明ケ、家主之御難儀掛不申候様ニ可仕候、借屋人も相立候様ニ随分世話可仕候事

一家持衆中貸シ家相応之借り人も無之明屋御座候ハ、御申聞可被成候、且又借屋人望之方角有之候而、家替致度段御申聞被成候ハ、随分聞繕為御知可申間、御家主も相對之上借り請可被成候、双方勝手宜様ニ可仕候、尤是迄之通、双方相對之上御借り請相極メ候ハ、請判可仕候事

右之通後々ニ至り相連仕間敷候、双方勝手宜様ニ可仕旨、御公儀様へ奉申上蒙御免候上ハ、全御權威ヲ以後々借屋支配人之様ニ毛頭仕間敷候、少ニ而も仕方悪敷御座候ハ、早速御公儀様へ御訴可被成候、いか様之曲事被為仰付候共、御町中へ対シ一言之子細申聞鋪候、為後日仍而如件

享保十七年子十一月

何之通 御組町中

家請人 誰 判

この願いが、大坂の先蹤にならつたものであることは明白であらう。しかし、両者には若干の相違が見える。

① 大坂の家請人仲間の一札では請判のときには「下請」を立てることを確約している。ところが、京のばあいはいずれの願いをみても、そのことの記載はない。京の家請人が「下請」に相当するものを取らなかつたとはおもえない。京の借屋人請状をみると、全て「引請」と「請人」の署名がある。この「引請」が大坂にいう「下請け」にあたると思われるが、京の願いにその記載がないのは、「下請」を必要としなかつたと言うよりも、当然のこととして記載されなかつたものとみてよいであらう。

② 大坂の家請人仲間は、家賃銀の滞納があり家主が家明けを要求したときには、家請人から家賃を弁償し、その家請人から弁償できなければ惣仲間から用立てると明言している。京では家賃の滞納があれば家を明けさせることを約束するのみであつた。

③ 実際どうであつたかは不明であるが、大坂のばあい貧窮人には判賃を容赦するとしていた。京にはその文言は見られない。

④ 判賃は、大坂は錢立てであるのを京都では銀立てにしている。金額にも差がある。享保一七年前後は、大坂の相場では、錢一貫文は銀一二匁前後であつたようであるから、換算して対比してみると左のとおりである。

大坂

京都

表店借り相応に暮すもの

年二〇〇文

表借屋

年一匁五分（一二五文）

” 軽き暮しのもの

” 一〇〇文

裏店

” 八〇文

裏借屋

年七分五厘（六二・五文）

⑤ 大坂のばあい、家請人仲間はあらかじめ奉行所とのあいだに折衝があつて天満の助成地に相当の引取小屋を用意していたようであるが、京都では「明家拵置候而云々」とあり、請人組合全体として引取小屋を準備していたのではないらしい。大坂では家請人仲間に対する奉行所の積極的な姿勢を看取しうと思う。

⑥ 京都では、洛中・洛外の一六か所に請人二人宛を配し、大坂の家請人の家請人の業務の他、家持と借屋人に對する借屋の斡旋も行うものとしている。

その他、「武家方并堂上方御家来衆中云々」の例外は大坂にはない特色といえる。また家主と借屋人とのトラブルを「品能相済候様ニ引請埒明ケ云々」と述べているのも、いかに京都らしい。

しかし、この願いは実現しなかつたらしい。というのは、これから二二年を経た宝暦四年（一七五四）五月になつて、また左の願いを出されている。⁽⁶⁹⁾

覚

此度洛中町々借屋請之儀、請判いたし候節、為印形代表借屋之分者銀壹匁二分つゝ、裏借屋之分ハ銀八分つゝ、其翌年より年々五節句毎ニ表借屋ハ錢三拾文つゝ、裏借やハ錢二十文つゝ取之、惣家請人之儀引受相立度旨相願候もの有之候、左候へハ宿料相立不申家替不仕候者引請、及出入不申様可仕、困窮之借屋ものへハ其品ニ合力等仕、渡世取続候様可致旨ニ候、尤親類・縁者を相願候故、是迄家請判代出不申ものハ相對を以是迄之通ニ為致可申候、且又是迄家請人ニ相立、少ハ渡世之助力ニモ仕居候ものも有之候ハ、其もの之儀ハ是迄立居候家請軒数之外ニ軒数相増為致世話、其ものへ難儀筋無之様可仕段申候、然ハ町々末々之もの勝手ニモ可相成哉、若差支之品存寄之もの有之候ハ、無遠慮其趣書付可差出候事

戊五月

右之通町々裏借屋等迄具ニ申聞せ、若不勝手之筋も有之差支候品有之ハ、如何様之儀ニ而差支候と申趣書付可差出候、此段随分かさ高ニ無之様、無急度内々ニ而承合可申候、以上

戊五月

雑色

町代 江

詳細は不明であるが、前回の願いとは若干の点で差がある。

一つは、従来家請人となって判錢を取って渡世の助けとしていたものはこれを認め、彼等が更に家請軒数を増すことも容認し、彼等の利益を侵害しないという箇条を加えたことである。特に、この条件を加えたのは、彼等の反対を緩め衝突を避ける意図があつたのかもしれない。

判賃は表借屋が銀一匁五分であつたのが一匁三分に下げ、裏借屋が銀七分であつたのを八分とし、二年目からは減

額するとしている。

この旨は、触ではないから大層にしないようにとのことで、町代宅に行事を呼び集め、よく申し聞かせそれぞれの組町に漏れないように伝えさせ、返事は町毎に要約し町代から公事方へ届けるようにということであった。

その後、六年を経た宝暦一〇年（一七六〇）四月に左の触⁽⁷⁰⁾が見える。

覚

一 此度洛中洛外借屋請之義引請度旨願出候もの有之候、右願人申口左之通ニ候

一 惣鉢借屋ものは是迄之通其俣ニ借宅仕候もの、此度新ニ請人取替候事ニ而ハ無之、此以後宅替之節此度之願人請人ニ相頼度もの并新ニ宿這入抔いたし借屋借り候もの請人ニ相頼度ものハ、右願人共相對ニ而家請人ニ相立可申旨申之

一 是迄所々借屋もの名目銀并小貸銀等二重三重ニ借受相滞、其所之家主町中引取人抔致難儀候故、向後ハ右銀錢貸方より家請人え相届貸付させ、家請人致加判、借屋もの之分限相応ニ銀錢為借受可申候得ハ、二重三重ニ相成候儀無之、及難儀候儀も無之候得ハ、右之通取計度候、併願人共加判之義貸方并借り人共相望不申候ハ、其分ハ先キ方勝手次第第二可致旨申之候

但、加判いたし候而も、右印料抔と申候而ハ請取不申旨申之候

一 家主る家人用ニ而借屋明させ度節ハ、右願人とも家請ニ相立候分ハ早速家替致させ、相滞不申候様可致旨申之候

一 右請印料として最初表借屋ハ老奴老分五リン、裏借屋七分六リン、其後五節季毎ニ表借屋者四分八リン、裏

借屋ハ三分つゝ借屋共々願人方へ請取之、此外少も相掛申間敷旨申候

右之趣ニ候得ハ、町々勝手ニも相成可申段願人共申候ニ付、町々へ右之様子申聞、於町々得与相考、否之趣委書付可差出段可申達候、尤右之儀ニ付町々之もの共大業ニ寄合等致間敷旨可申聞事

辰四月

此借屋請願人ハ

左官触頭

池田屋喜兵衛

大宮四条下ル町

藤屋吉右衛門

猪熊仏光寺下ル町

海老や彌右衛門

一条室町東入町

松や九兵衛

右四人より当辰三月願出候

この願いは、前記宝暦四年のものとは別口と思われる。少なくとも、条件には相違がある。即ち、ここでは借屋人の借金は貸主から家請人に届けさせ、家請人は借用証に加判し、これによって借屋人の借金額を分限相應に留めさせるといふ。また、判錢を、前回の願いよりも少し引き下げている。

右の願いは実現したらしい。それから二年八ヶ月を経た宝暦一二年（一七六二）一二月二日付の次の触は、会所の存在を前提としている。

町々借屋之者共実之親類家持無之、家請人相立候もの無之借屋もの、相對之上極之印料を取家請ニ相立、尤目印を差出シ町々向寄ニ家請会所之もの共引請ニ而差配致候借屋請人差置、右引請之請狀ニ候故、会所之者も致奥印

候儀、先達而願出差免置候、然ル処右差配之向寄之外内証ニ而印料を取家請いたし候ものも有之由ニ候、右躰之者有之候而者紛敷、取_レり不相成難儀之段申出候間、以来印料を取無縁之者之家請印形いたし申聞敷候右之趣洛中洛外へ可相触者也

午二月二日

いうところは、家請会所が引請の借屋請人が町々向寄にあり、その借屋請人が、実の親類等がなくて家請人のない者のために、相對のうえて印料を取り家請に立つたばあい、会所も奥印をしてきた。ところが、会所に内証で家請をするものがあるため紛らわしく、取締に困ると申し出があった。そこで、印料を取って無縁のものの家請を禁止するといふのである。

しかし、それから一年余後の明和元年（一七六四）四月七日には左の触⁽⁷²⁾が出された。

町々借屋之者共、実之親類家持無之、家請人ニ相立もの無之、借屋もの相對之上家受ニ相立候儀、家請人会所へ相對可致旨、先達而相触置候得共、此度右会所相止させ候間、此旨洛中洛外不漏様可申通事

申四月七日

家請会所は廃止されたのである。その理由は明らかでない。家請会所は四年を経ずに消滅した。

明和七年（一七七〇）になって、またまた家請会所の願いが出された。⁽⁷³⁾左の触書を見ると、奉行所は家請会所の設置を勧奨している。

町々家請人之儀、是迄相應之音物等を遣ひ、或ハ礼銀等差出し失脚等多ク相懸候儀ニ付、以来洛中洛外家請人之儀向寄_〳ニ会所相建、右会所年寄之者へ印札を相渡置、町々へも印鑑相渡、右印札を目印いたし家請人ニ

相立、会所にて相改、家請状致奥印、右印料として半季ニ表借屋より銀壹匁五分宛、裏借屋より銀八分宛取之、家入用之節者無滞会所へ引取、勿論懸合等も有之候ハ、是又引請埒明遣、困窮人またハ長病にて致難儀親るい等も無之ものハ会所へ引請致、施薬等養生可致遣旨願人有之候、右之趣ニ候得者借屋人共勿論、家主等勝手ニも可相成儀ニ候、右之趣借屋人共へも具ニ為申聞、借宅人共存寄之趣兩様ニ相分、指支等申立候共、如何様之訳ニ而指支と申儀具ニ答書可差出候

一 前方右同様之願人有之相尋候処、親類縁者を相頼候故、出銀無之段申答候町々多分有之候得共、礼銀等指出シ家請相頼候者ともハ、音物等相送候趣相聞得候、全音物等無之相頼候之儀者稀成様子ニ候、左候得者外ニ失脚等無之、相定候印料指出し、請印形相頼候方、却而勝手ニ可相成候、尤願人へも遂吟味候処、印形之外決而懸り物不相懸候段申之候、勿論願人より公儀御益等も申立候得者、与得相考返答可申出候
 しかし、これに対する町人達の返答は消極的であつた。⁽⁷⁴⁾

町中返答書

一 町内借宅之者共請人印形勝手ニ相成候義、相願候者在之候ニ付御尋難有奉存候、町内借屋共相尋候処、銘々縁者懇意之者共相頼、住居仕罷在候得者、聊礼銀音物等少も相送り不申候、困窮之者共候得者、出銀仕候義敷敷候間、是迄之通ニ被為仰付被為下候様御願申上呉候様相頼候間、御返答申上候、御慈悲之上是迄仕来り候通ニ被為仰付候ハ、難有可奉存候、以上

年号月日

衣店北町

町中

以上二通の文書は日付を欠いていたが、同年一二月の日付を持つ次の文書⁽⁷⁵⁾も関係するものと思われる。

就御尋々恐返答書

一 去十一月十二日組内当町年寄被召出、此度家請人引受申度願人御座候ニ付、町々勝手ニも可相成歟、又者差支之義有之哉相考、御返答可奉申上旨被仰付難有奉存候、此義於町々借家家持之もの共へ得与為申聞奉承知候、是迄借屋請之義者親類縁者またハ主人傍輩知音之者へ相頼来り候ゆへ、急度相定候礼銀音物等相送り候義聊無御座候旨、借屋之者共御返答奉申上候、尤右之趣ニ而年来相済来候義ニ御座候故、家主之者共も右借屋人共御願上申上候通、何分相不替是迄之通被成置被下候様ニと一統々恐御返答奉申上候間、何卒御慈悲ヲ以此段被為聞召分、右之通被仰付被下候ハ、町々一統難有御義奉存候、以上

明和七年庚寅年 十二月

組丁

御奉行様

年寄 連印

天明二年（一七八二）寅九月一四日の左の触書は、渡世同様に引取人となることを禁止している。⁽⁷⁶⁾

近来借屋人共相互ニ引取人ニ相立罷在、懸り合引取候節差支、彼是甚紛敷いたし方、不埒ニ候、以来相互ニ引取人ニ立候儀堅致間敷候、此外所々ニ引取ニ相立、渡世同前ニいたし罷在候もの有之趣相聞え、是亦不埒ニ候間、向後右躰之儀致間敷候、尤家主共儀も兼而心を付、引取人之儀入念取之候様可致候

右之通相触候上者、以来右躰之儀有之候ハ、急度咎可申付候間、此旨洛中洛外裏借屋ニ至迄不洩様可相触もの也

寅九月十四日

その後、家請人に関する触はしばらく見られないが、慶応二年（一八六六）四月一八日の触の第八条に左の箇条がみえる。⁽⁷⁷⁾

一 町々借宅之者無縁之者ニ家受印形致間敷候旨前々触置候儀ニ而、一体家受人ニ不限惣而人之受ニ立候儀ハ無

縁之者不相成管之处、家受人之外奉公人受人も判賃申受、無縁之者受人ニ立候を渡世同様ニいたし候者、追々増長いたし候趣ニ相聞、不埒之事ニ候、畢竟利欲に拘り右身体不埒之働いたし候儀ニ付、急度可相改、以来右体之儀相聞候へ、召捕厳重ニ遂吟味急度可申付候

明治元年八月の布令は、諸国から登ってきた者が借宅するさい京都府に差出す届の書式を定めて⁽⁷⁶⁾いるが、その文中「以前者家受人と唱候者在之、其者へ借宅住居相頼候節者親類請判之証文を以世話致候处、先年家請人被相止メ、當時ニ而者家持人直相對ニ而家宅賃渡候云々」とみえる。ここにいう「以前…」は宝曆四年であり、「先年…」とは明和元年をいう。

(3) 借屋人請状

大坂では、板行された諸証文雛形集に借屋人請状を見ることができたが、京ではそのような刊行物を知らない。管見の範囲で雛形としては、元誓願寺通智恵光院西入の「元中之町文書」⁽⁷⁹⁾が左のような「借屋請状・引取証文書式卷子」を伝えているのを知るのみである。

借屋請状之事

- 一 本誓願寺通中之町何屋誰殿家ニ、何屋誰と申仁、借屋仕居被申候、此仁生国何之国何郡何村之人ニ而、我等親類ニ紛無御座候ニ付、請人ニ立申候事
- 一 従先々御奉行様被為仰出候御法度御条目之趣一々相守らせ可申候、次ニ御改之牢人一類又ハ切支丹宗門ニ而も無御座候

一 博奕類・頼母子一切之諸勝負・遊女野郎之宿堅ク致させ間敷候、若又親子兄弟来り逗留仕候敷、借り主他所へ罷出夜泊り仕候時へ家主兩隣え断可申事

一 老ヶ月前ニ家主より宿替候へと被申候ハム、早速替させ可申候、何角相延候ハム借り主諸道具共ニ請人方へ引取可申候、万一此仁ニ付何様之六ヶ敷儀出来候共御公儀様え請人罷出其明メ申上、御町中家主へ少も御難懸申間敷候、為後日之宿請状仍而如件

何之通何之町

年号 月 日

引請 何屋誰

何之通何之町

請人 何屋誰

本誓願寺通中之町

借主 何屋誰

年寄 誰殿

町中 参

引請証文之事

一 此何屋誰と申仁、其方殿家ニ借宅仕候ニ付、我等請人に相立申候、右誰儀是迄何之掛合出入少も無之候、然ル上者右誰ハ勿論、家内同居掛人連も是迄之懸合者不申及、此以後御上納銀并小貸会所錢其外置銀懸合右躰之証文買掛等如何様之六ヶ敷出入出来仕候とも、右懸合共我等かたへ引請、急度埒明、尤家内同居之者諸道具共我等方之引取、早速家明渡、御町家主へ少も御難儀掛申間敷候、為後日之引請証文依而如件

何之通何之町

年号 月 日

引請 何屋誰
何之通何之町

本誓願寺通中之町

請人 何屋誰
借主 何屋誰

家主 何屋誰殿

この雛形が作成された年代は詳かではないが、先の「借屋請状之事」の最後「為後日云々」のまえの行間に細字で「且天明式年寅九月御触書之趣奉承、相互ニ引請之証印等一切無御座候」の書き込みがあるから、この前後のものと思われる。

ここに見えるように、京では、借屋に当って二通の請状を作成するのが早くから通例となっていたようである。前掲の下本能寺前町文禄三年の「定」に「両請」とあったのはこの形式をいうのであろう。借屋人請状は町の年寄および町中であてられたものであって、家主ではない。家主にたいしては後の引取証文である。秋山国三氏も、三条衣棚北町の町中であてた「家請状之事」「引取証文之事」を紹介しておられるが、これと殆ど同内容である。⁽⁸⁰⁾

京都の町方文書のなかにこの種の請状は数多く見ることができるが、同形式のものは挙げるまでもないので、変わったものを一・二引いて見よう。⁽⁸¹⁾ 次の文書は前記の二通が一つの文書になっている。

借屋請引取一札之事

一 其御町内大坂屋吉三郎殿之家ニ山城屋卯兵衛に仁借宅仕候、我等親類ニ御座候ニ附、請引取人ニ相立申候所
実正也、然ル上は御法度之切支丹宗門ニ而も武士之浪人ニ而も無御座、先祖より能存知仕、則宗旨ハ代々浄土
宗ニ而、別紙寺請状差入置候、慥成仁ニ御座候附、我等請引取人ニ相立申候

一 從御公儀御本所様被為仰出候御法度御触書之趣、堅相守可申候、其外博奕諸勝負ハ不申及、諸名目金銀代呂物出入難洩出来仕候共、我等早速罷出埒明、御町内家主之少も御難儀相懸申間敷候、本人病氣ニ而商売難相成候節者本人ハ勿論、家内人数諸道具又ハ其節同居人有之候ハ、是又本人同様ニ我等方之早々引取早速埒明可申候

一 臨時出来候ハ、本人他国仕留守中ニ而も早速我等罷出埒明、諸入用掛り物等引請、御町内家主之少も御難儀相懸申間敷候

一 御家入用之節は何時ニ而も早速明渡可申候、其節本人他国之留守中ニ而も早々引取、御家明渡可申候、且又宿料之儀者毎月二十八日無滞差入可申候、万一相滞候ハ我等より急度相立可申候、右之条々急度承知仕候、其上本人彼は申立、御家明兼候ハ、其節家内人数諸道具共我等方之御持懸ケ可被成候、其節我等一言之申分無御座候、右之外如何様之六ヶ敷出入難洩有之候共、我等方之引取、少も御町内家主之御難儀相懸ケ申間敷候、後日為念之請引取一札仍而如件

嘉永六年

丑九月

七条通新町東之入

引取人 河内屋平兵衛

大仏下鍛屋町

家請人 近江屋藤七[㊦]

借主 山城屋卯兵衛

口請人 河内屋又七

七条新地

上二宮町

御年寄

町中江

家主大坂屋吉兵衛

次の借屋請状は、三条通の西にある村方文書である。

借屋請状之事

一 当御村内百姓才八郎殿家ニ百姓万吉と申仁御家借り請度、此仁生国従先祖能存知慥成人故、我等請人ニ罷立申候事

一 従御公儀様御法度之趣急度為相守可申候

一 御構在之武士之浪人ニ而も無之候、博奕諸勝負遊女之宿、むさと人之出入多く為致間敷候

一 御上納金銀ハ不及申、小貸等銭借り受候儀一切無御座候、御家御入用之節は何時成共明させ可申候、万一及遅滞候ハ、妻子諸道具引取人方え引取、早速家明御渡可申候

一 宗旨は代々浄土宗ニ而、則寺請状別紙ニ差出可申事

一 何事ニ不寄、御村方之御作法相背キ申間敷候、右之外如何様之六ヶ敷儀出来候共、我等兩人何方迄も罷出、急度埒明ケ御村方家主へ少シも御損難相掛ケ申間敷候、為後日借屋請状依而如件

文久元酉年

請人 百姓菊四郎 印

九月

西院村之内

西三条台

引取 丹波屋仙太郎 印

庄屋

借主 百儀萬吉 印

年寄 中

家主中

- (51) 秋山国三・仲村研究『京都「町」の研究』二九二頁。
- (52) 下柳南半町「定条目」『史料京都の歴史』七、上京区、一一七頁一七一號。
- (53) 中立売町「定」前掲、二二九頁、二六號。
- (54) 上ノ町「町式定」前掲、三八九頁、二一號。
- (55) 清和院町「定法度之事」前掲、二二六頁、二五號。
- (56) 同「町中定之事」前掲、二三一頁、二八號。
- (57) 冷泉町「定」前掲、九、八六頁、二六號。
- (58) 同「定」前掲、九五頁、三四號。
- (59) 下本能寺前町「定」前掲、一六〇頁、二四號。
- (60) 同「定条々之事」前掲、九、一六一頁、二五號。
- (61) 柳八幡町「諸事町中式目之定」前掲、九、一六六頁以下、三六號。
- (62) 二条西洞院町「定」前掲、二四三頁、三七號。
- (63) 足袋屋町「式目之覚」前掲十二、一七八頁、一六號。
- (64) 秋山国三・仲村研、前掲、二九四頁。
- (65) 『京都町触集成』第八卷、四〇四頁、一一八〇號。
- (66) 秋山・仲村前掲、二九二頁。
- (67) 秋山国三『公同沿革史』上卷、二六六頁。
- (68) 「家請人仕方覚書」『京都町触集成』第二卷、一七九頁、五五〇號。
- (69) 「覚」前掲、第三卷、三六一頁以下、一四九六號。
- (70) 「覚」前掲、別卷二、四八六頁、補七二三號。
- (71) 前掲、第四卷、二一八頁、八〇五號。

- (72) 前掲、三〇五頁、一一一〇号。
- (73) 前掲、第五卷、九二頁以下、三四六号。
- (74) 「町中返答書」前掲、九三頁、三四七号。
- (75) 「就御尋乍恐返答書」前掲、第五卷、九八頁、三六二号。
- (76) 前掲、第六卷、二二三頁、七四五号。
- (77) 前掲、第十三卷、八二頁、二二一号。
- (78) 前掲、二四二頁、六一九号。
- (79) 元中之町「借屋請状之事」京都市歴史史料館の写真による。
- (80) 秋山、前掲、二六八〜七〇頁所引。
- (81) 以下二通の文書は京都市歴史史料館の写真による。

結 言

冗漫な資料の引用で繁雑となったので整理しておく。

借屋にさいして請人を立てることの意味は、幕府および京・大坂の例からすれば、以下の三点があった。

第一は、京の各町では、江戸時代になる前にさかのぼる「町」という共同体に加入するための手続上の必要であった。「町」の住人となるためには、町内全員の合意が必要であり、新入者の身元を保証する請人が要求された。江戸時代になっても、請人は町の全員に対して借屋人の保証をしなければならなかった。京で行われた借屋人請状は、前掲のように年寄・町中にあてて書かれている。

第二は、治安維持のための警察上の必要である。先に引用した触書でも「いたずら者」「たずね者」を置くと、名

主・大屋・五人組まで連帯責任を負わされた。引用はしなかったが「浪人者」に対しては特に厳しい規制をおこなっている。全ての借屋請状には、借屋人を「生国よりよく存じ慥成る者ニ付云々」とか「切支丹宗門ニ而ハ無之云々」「御公儀様御法度之儀ハ不及申云々」と借屋人の身許や行動について保証する文言を記載している。

第三は、家主に対する私法上の諸問題の保証である。家賃の債務について「公事方御定書」は、地代金と店賃金については、従前々之例として「三十日限済方申付、日限ニ不相済候ハ、切金ニ為差出、其上済方不埒候ハ、身身限ニ可申付、」としている。家賃の債務は、一次的には借屋人に支払義務があるが、借屋人が支払えないときは請人が責任を負わなければならなかった（前引「律令要略」）。また家主の要求に従って、必ず家を明け渡し、御迷惑をかけないとの文言も不可欠であった。

第一、第二の点からいえば、家請人は未知の他人に対し対価を得て請に立つと言うべきものではなかった。

ところが大坂では、享年一七年正月、家請人仲間が認められた。対価を得て家請人を引き受ける業者の特権的集団である。尤も、享保一七年の家請人仲間の差出した一札によれば、親類あるいは「しるべ之者」から「下請人」を取るとしていた。つまり、家請人仲間が保証するのは、第三の私法上のトラブルであって、第二の警察上の責任は下請人が負うという建前であろう。しかし、いわゆる天保改革に当って出された一三年八月二三日の触には、家請人仲間を解散すれば「当地ニ人主無之者、家賃借ハ勿論、外借屋人家入用有之、家主より家明之儀申出候節、取扱方不便利相成、旁差支云々」といっているところを見ると、これらの家請人仲間は事実上第二の下請け人の機能も果たしていたものと思われる。

大坂で家請人仲間が認可されたのは、享保一七年正月であった。京では同年一月になって家請人の願いが提出されたが、これが大坂の家請人仲間をまねたものであることは明らかである。しかし、京ではこの時期には実現せず、

知りうる限りでは前後四度の願い出があり、そのうち宝暦一〇年度の願いが認められたが、これも五年足らずで廃止された。

京での申請の相違点を、最初の享保一七年一月の内容と比較しながら、振り返ってみよう。

享保一七年十一月 この時の願いと大坂のばあいとの差異については先に述べた。

宝暦四年五月 判賃の減額。困窮の借屋人に合力。従来からの家請判の渡世は拒否せず家請軒数を増すことも認めらる。

宝暦一〇年四月 さらに判賃の減額。借屋人の借金に家請人は奥判して借金額を分相応に調節する。

明和七年 個々の家請人依頼による借屋人の失費（多額の礼銀・音物）の解消。

こうしてみると、宝暦一〇年度の申請が認められたのは、判賃の減額と借屋人の借金に対する家請人の奥判ということになる。後者は、借屋人の過分の借金によるトラブルの防止という機能を果たすものであり、貸主の利益になり、またそのような訴訟を減らすという意味では支配者の便宜にもなるであろう。しかし、わずかな期間で廃止されたことをみれば、その利点はあまり意味がなかった。明和七年に、個々の家請人依頼による借屋人の失費解消を称する申請も、家主、借屋人双方の反対に逢って実現しなかった。

それでは、京でこのようにうまくいかなかった家請人の制度が、大坂では明治初年までとにかく継続した理由はどこにあったのか。

大坂は、京のように古い伝統のある町ではなかった。都市としての大坂は、豊臣秀吉の城下町として建設され、諸国の住民を集めて急膨張し、大坂の陣後の復興に当たっても、伏見の町人の集団移動をはじめ、諸国からの寄り集まりによって形成された。そこには京の町にみられたような排他的な空気は当初からなかった。かなりこだわって述べた

が、大坂の借屋人の占める比率は他都市よりも格段に高かった。

『大坂市史』の触書を通覧しても、京や江戸と比べて、借屋人に関する規制の少なさは顕著である。先に挙げた大坂で唯一といってよい借屋人に関する触書も江戸から出された書付を伝達したものにすぎなかった。

近世の大坂が商業の町であったことは縷言を要しない。発達した経済性は合理性と表裏する。土地を持った町人達
は、或るいは借屋を建てて収入とした。「丁人共儀は、借屋店貸等之利益ヲ重ニ仕、外ニ土地より取入もの等無御座候」という。これらの家主たちにとって、家賃収入の確保が重大関心事であった。したがって、貸家をめぐるトラブルを回避し、家主の利益を保証する家請人仲間の存在は極めて歓迎すべきものであった。

以前、私は大坂で行われた「おこし奉公人」について書いたことがある。これは大坂の、行き倒れ・乞食・非人などで働く意思のあるものを、口入の手を経て奉公人に仕立て、労働力の需要の高い西国に送り出す制度である。江戸でも、町を横行する無宿・浮浪の徒の処置に手を焼き、町奉行は浅草弾左衛門にこの大坂の制度を採用してはどうかと意見を徴したことがあった。詳細は拙稿を⁽⁸²⁾ご覧いただきたいが、大坂では、こういう発想が企業として実現した。大坂の家請人仲間もこうした経済的合理性から成り立った企業の一つであった。

(82) 拙稿「おこし奉公人」平松義郎博士追悼論文集『法と刑罰の歴史的考察』所収。